「必要十分条件」論文(C. R. Rogers, 1957)の再々検討(その 5)

～ロジャーズはアメリカのニーチェである～

泉野 淳子

(足利工業大学看護学部)

キーワード: 脱キリスト教、ユニオン神学大学、履修記録

New Review of "The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change (C.R.Rogers, 1957)" -5-

Junko IZUMINO

(Ashikaga Institute of Technology)

Key Words: de-Christianization, Union Theological Seminary, Academic Record

目 的

本研究は、キリスト教思想の観点から表題論文を検討することにより、ロジャーズのカウンセリング論の底流には脱キリスト教の精神が流れていることを明らかにするものである。シリーズ5回目の今回は、論文そのものから一旦離れ、彼が神学生だった頃、具体的に何を学んでいたのか歴史資料により検証することを目的とする。

方 法

ユニオン神学大学バーク図書館 The Burke Library at Union Theological Seminary に問い合わせ、過去に在籍した学生の履修記録がアーカイブに保管されていることを確認した。個人情報の公開は、ロジャーズが学籍を離れてからすでに75年以上が経過し、FERPA(Federal Privacy Laws)に抵触しない。そのため原簿の写真複写を依頼して、当時開講されていた科目名、担当教員名、成績ほかの資料を入手した(写真1)。そこに記載されている教員名はラストネームのみだったので、同大学のホームページからオンラインで公開されている創立以来の教職員在職記録を辿り、年代とフルネーム、専門分野を照査し担当教員を特定した。

結 果

ロジャーズ在籍中(1924-1926)に開講されていた科目名は全部で21科目。彼が受講し成績が記載されているのは、旧約聖書 Old Testament (J. A. Bewer)、新約聖書 New Testament (J. E. Frame, E. F. Scott)、新約聖書解釈 New Testament Exegesis (E. F. Scott, J. E. Frame)、英語聖書 English Bible (H. E. Fosdick)、キリスト教倫理学 Christian Ethics (H. F. Ward)、教会史 Church History (A. C. McGiffert, A. W. Vernon)、組織神学 Systematic Theology (W. A. Brown)、宗教哲学 Philosophy of Religion (E. W. Lyman, J. H. Howson)、宗教教育 Religious Education (H. S. Elliott)、実践神学 Practical Theology (H. S. Coffin)、朗読法/演説法 Vocal Culture (F. Carmody) の11科目。()内は担当教員名。

牧会神学 Pastoral Theology は受講登録したようだが評価点は付けられていない。説教学 Homiletics やキリスト教制度/機関 Christian Institutions などは受講されていない。新約聖書解釈は受講されているが旧約聖書解釈は受講されていない。新約聖書は同一科目で別教員によるものを二回に渡って受講しているが、旧約聖書は一回のみである。1年目の平均評価点は91.75(満点が100と思われる)であり、2年目の平均評価点は記載されていない。

履修記録は見開き2ページになっており、上記一覧表は左ページに、右ページの欄外には中世史(専攻)94、フランス語96、アメリカ史93.5、平均評価点94.375と、まとめられている。これはウィスコンシン大学時代の歴史学専攻が中世史であったことから推察して、同大学時の成績が転載されているものと思われる。

写真1 ロジャーズのユニオン神学大学時代の履修/成績表

考 察

かつて、ある学会誌に「ロジャーズにおけるキリスト教思想の影響」に関する論文を投稿した際、査読者から「(彼のカウンセリング論は) 現前する子供達との関わりから発展したものであり、難解な神学やキリスト教思想の影響(を想定すること)は事実と反する」という批判を受けた。果たして本当にそうなのだろうか。

彼は「聖書も預言者も、フロイトも実証研究も、神や人間の啓示も、私自身の直接の経験よりそれらを優先することは出来ない」(Rogers, 1961)。「人間をポジティブなものと捉える視点は革命的であり、それは伝統的なキリスト教の教えに対立する考え方である。キリスト教神学では人間は罪深く邪悪なものとされている」(Rogers, 1985)と、自身の立脚点はキリスト教と対立するものであることを表明している。

熱心なキリスト教信者の両親の下に生まれ育ち牧師になることを志した者が、亡くなる1年余り前(83歳時)の講演において反キリスト教の考え方を尚も表明している。スタート地点と到達点が全く逆である。そのダイナミックな精神の転向は、内面深くにおいてひっそり行われていたと考えられる。臨床心理学者として宗教とは全く無関係に実証的研究を行いながら、しかし、深層においては信仰からの離脱、正反対の地点へと緩やかに方向を転換していた——このような仮説と検証を行う一助として今回の資料は有用である。

彼のカウンセリング論の根本にある思想を理解するためには、キリスト教を避けて通ることはできないだろう。それを明らかにするため、このシリーズはもう少し続く。

引用文献

日本人間性心理学会、投稿論文査読レビュー、1999
Registrar's office Log Book ; Rogers C.R. 1924-1926,
The Burke library's Union Archives. The Union
Theological Seminary in N.Y.